



信じることで子供を伸ばす

保護者と話をしていると、「何度言っても勉強しないんです。」
「親の言うことを聞かなくて困っています。」などの悩みを聞くことがあります。これは、何百年と続いてきた人類共通の悩みの様でもあります。そこから解決に導くためには、「子供に任せること」だと私は考えています。もっと詳しく言うならば「子供の意思に委ねること」だと思います。以前、担任していた子供の保護者の方は、いつも子供の姿に苛立っていました。そこで、いろいろ話をしました。私「なぜ、勉強して欲しいんですか？」保「テストで悪い点を取って欲しくないからです。」私「なぜ悪い点を取って欲しくないんですか？」保「将来、後悔してほしくない。」私「なぜ後悔すると思うのですか？」保「いい仕事に就けないから。」私「いい仕事はどんな仕事ですか？」保「……。」



このように出口が曖昧で、あくまでも苛立ちの原因は、保護者の感情であることを一緒に確認していきました。しばらく時間が経ち、その保護者と話す機会がありました。「あれから、『勉強しなさい』って言う言葉をなるべく使わないようにしていたら、子供は必要なときに自分から勉強していることに気付きました。私が勝手に『しない』って決めつけていました。私が『しない』って決めつけているから、子供もそうになっていたんですね。」という声でした。さらに、卒業前に「勉強したことを認め励ますように徹したら、子供は自分から勉強する習慣が付いて、親子の会話も増え、家の手伝いもしてくれるようになったんです。」と苛立つことのない嬉しそうで澆刺(はつらつ)とした保護者の表情が印象的でした。その子供も今ではすっかり成人となり、人の役に立つ仕事に就いて立派に頑張っています。

家庭でできるコーチング

「馬を水辺に連れて行けても水を飲ますことはできない」という諺(ことわざ)をご存知ですか?英国産の諺で“You can take a horse to the water, but you can't make him drink.”という英語表記になります。「馬に水を飲ませてあげようと思って水辺まで連れて行くことはできる。しかし、水を飲むか飲まないかは馬自身が決めることであり、無理矢理人が飲ませることができない」ということです。つまり、周りの人は様々な支援を試みるけれど、最終的にそれを実行するかどうかは本人の意思なのです。その本人を自発的に行動させるコミュニケーションのことをコーチングと言い、企業の人材育成・組織開発でも活用されています。

上記の保護者の例をとってみると……

【提案型】「ご飯の前に宿題をする?それともご飯の後に宿題をする?」

→「やる」「やらない」の選択自体を子どもに任せる

それでも行動に踏み出せない子供には「リクエスト型」が有効です。

【リクエスト型】「ごはんの前に、宿題をやってみようか?」

→「やる」という答えを渡して、行動は本人の主体性に委ねる

この二つを意識することで、「宿題やったの?早くしなさい!」という命令口調によって、子供の自己決定の場を奪う機会が減ります。このコーチングは、日常の些細な場面にも応用できます。こういう日々の体験の積み重ねによって、「自ら決める力」が育つようになるのでお奨めです!

